

協同労働研究の深化 —研究者と実践者を結んだ協同研究がはじめる—

本号の特集テーマは、今年度の協同総合研究所の研究のあり方を端的に示しています。協同総研5原則^{*1}の1つに『実践と研究の結合の原則』を掲げています(以下参照)。

「研究所は労働者協同組合と協同運動が直面する実践的、理論的な諸課題の解決を主目的とします。実践家が研究者に近づくことをめざし、また研究者が実践家に近づく中で、実践家と研究者の固い連帯が作り出されねばなりません。この連帯の強化こそが研究活動を成功に導く保障となります。」

2000年代後半には東京農工大学などの大学とワーカーズコープの福生や東久留米の現場での共同研究を進めてきました。それらの歴史を踏まえながら、今年度は研究者が実践的な視点から協同労働を考え、実践者は研究者の報告から研究的視点で協同労働を深める場を通じて、研究と実践が融合することを目指していきたくと考えています。

その具体的な取り組みとして、「『協同労働』の多元的な価値と可能性を考える～研究者と実践者の協同研究がはじまる」をタイトルに「総会記念フォーラム(6月25日)」と「研究会(8月6日)」を開催しました。なお「きょうどう研究」といったとき、一般的には「共同研究」の文字をあてますが、今回は心と力をあわせて仕事をする意味を持つ「協同研究」としています。

総会記念フォーラム・研究会は共に、協同総研の理事の研究者が報告者となり、協同労働を実践するメンバーがコメント、協同総研の常任理事がコーディネーターをしました。研究者の研究テーマから協同労働の特徴が報告され、コメンテーターからは報告に対して実践から見える協同労働との親和性・相違点・感想が寄せられ、コーディネーターによって協同労働のあり方を探究する場にできました。「事務局主体」の研究会よりも、より多くの意見が出され、当事者として協同労働を深める場にできたのではないかと考えています。今年度はこのような場を多様につくっていきます。

特集で議案書も掲載しています。今年度も「協同」の価値を会員とともに現代社会に問い、創造し、持続可能なコミュニティづくりに資する研究活動を行います。

相良 孝雄(協同総合研究所 事務局長)

^{*1} 1991年の協同総研発足時から掲げています。「人類的見地の原則」「変革の立場の原則」「人間発達重視の原則」「実践と研究の結合の原則」「自立の原則」の5原則です。

2022年度協同総研総会記念フォーラム

「協同労働」の多元的な価値と可能性を考える

～研究者と実践者の協同研究がはじまる～

2022年6月25日(土) 13:30～16:30 / 労協連会議室・オンライン



●開催趣旨

労働者協同組合法の施行により、協同総研の研究活動も新たな段階を迎え、その中心的なテーマである「協同労働」をより広く、より深く研究するために、研究者と実践者が共に参加する研究の場づくりが大切である。これまでも協同総研は、両者をつなぐ役割を担ってきたが、今後さらに研究者と実践者をむすんだ協同研究を進めていくために、本フォーラムをその第一歩と位置づけた。

今回は、協同総研の理事3名の方にそれぞれの研究分野(専門分野)と「協同労働」の接点、「協同労働」への関心などについてご報告いただき、それに対して、協同労働の実践者3名から一緒に研究したい・深めたいポイントについてコメントしてもらう。お互いの問題意識を出し合いながら両者の協同による研究活動の可能性を探る。

今回は結論を出すための会ではなく、どのような研究活動を行っていくのか、問いをたてることで、今後につなげていくことを目的とする。

報告者(協同総研理事)

- ・朝倉景樹(TDU・豊川大学代表)
- ・酒井京子(大阪市職業リハビリテーションセンター所長)
- ・木原奈穂子(鳥取大学講師)

コメンテーター(ワーカーズコープの実践者)

- ・玉木信博(センター事業団専務理事/協同総研理事)
- ・扶藪文重(センター事業団東京三多摩・山梨事業本部長/協同総研会員)
- ・馬場義竜(はんしんワーカーズコープ代表理事/協同総研会員)

コーディネーター

- ・藤本穰彦(明治大学准教授/協同総研常任理事)